2020年1月31日
奥能登国際芸術祭実行委員会

報道関係者　各位

奥能登国際芸術祭2020　最涯の芸術祭、美術の最先端。

第２弾参加アーティスト決定

奥能登国際芸術祭実行委員会は、石川県珠洲市を舞台に第２回目となる「奥能登国際芸術祭2020」を2020年９月５日(土)～10月25日(日)までの51日間開催いたします。
岬めぐりをテーマに、第一線のアーティストが旧駅舎、旧学校、空き家などを活用し、珠洲の自然や歴史、伝統文化を表現した最先端の現代アートを、“さいはて”の地から発信します。
このたび、第２弾となる参加アーティストが決定しましたので、お知らせします。
つきましては、貴媒体への掲載や取材をご検討いただければ幸いです。

第２弾参加アーティスト一覧（2020年1月31日時点）

このたび、新たに作家12組の参加が決定しました。
エルサルバドルのシモン・ベガや、ロシアのアレクサンドル・ポノマリョフなど、多様な国のアーティストが加わり、2020年1月末時点で世界11ヶ国、作家23組の参加が決定しています。
開催までに約40組の参加作家を発表する予定です。

青木野枝(日本)、カルロス・アモラレス(メキシコ)、大岩オスカール(ブラジル)、尾花賢一(日本)、金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ](日本)、金氏徹平(日本)、キムスージャ(韓国)、スボード・グプタ(インド)、さわひらき(日本/イギリス)、サイモン・スターリング(イギリス) 、陳思【チェン・シー】(中国)、中島伽耶子(日本)、中谷ミチコ(日本)、カールステン・ニコライ(ドイツ)、蓮沼昌宏(日本)、原広司(日本)、クレア・ヒーリー＆ショーン・コーデイロ(オーストラリア)、ひびのこづえ(日本)、シモン・ベガ(エルサルバドル)、アレクサンドル・ポノマリョフ(ロシア)、村上慧(日本)、盛圭太(日本)、力五山(日本)

※下線が第２弾の発表アーティストとなります。　※表記は五十音順
※各アーティストのこれまでの作品紹介も含めたプロフィールは、以下のURLからご覧いただけます。
https://oku-noto.jp/artists/

ご取材・広報についてのお問い合わせ
奥能登国際芸術祭実行委員会事務局　　担当：灰庭、小菅
〒927-1214　石川県珠洲市飯田町13部120番地1(珠洲市奥能登国際芸術祭推進室内)
TEL：0768-82-7720　FAX：0768-82-7727　E-mail：press@oku-noto.jp
公式WEBサイト　oku-noto.jp
Facebook　https://www.facebook.com/okunotojp
Twitter　https://twitter.com/okunotojp
instagram　https://www.instagram.com/okunotojp

奥能登国際芸術祭 珠洲
SUZU 2020
OKU-NOTO TRIENNALE

第2弾参加アーティストプロフィール（2020年1月31日時点）

『ビュー』

尾花 賢一（日本）

群馬県生まれ。筑波大学芸術研究科洋画専攻修了。人々の営みや、伝承、土地の風景から採取した『マンガ形式のドローイング』を制作。覆面や不穏な空気を纏った人を主人公とした物語を、絵画や立体を織り交ぜながら表現している。展示空間の中に足を踏み入れ、虚構と現が交差しながら物語へと同化していく作品を探求している。

「静かな海流をめぐって 奥能登曼荼羅」 奥能登国際芸術祭2017

金沢美術工芸大学 アートプロジェクトチーム［スズプロ］（日本）

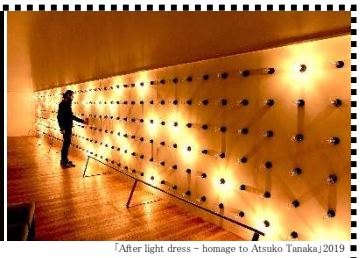
奥能登国際芸術祭を機会に、金沢美術工芸大学の教員と学生が専門の垣根を超えて結成したチーム。日本海と共に発展してきた珠洲の歴史的・社会的背景をふまえ、「静かな海流をめぐって」をテーマに掲げて活動。平成28年4月から本格的にフィールドワークを開始し、環日本海を見渡した調査研究を行いながら、奥能登でしか表現し得ない大規模な作品の制作に向けて日々の活動を続けている。

Lovely Corner

陳思 【チェン・シー】（中国）

1983年、北京生まれ、在住のイラストレーター／アーティスト(別名ビッグ･オレンジ)。「かわいらしさ」をテーマに、現代社会の緊張感と不安感を癒やしをもたらす作品制作を行う。作家のドンドンシャンと絵本を出版し、その展覧会を北京で開催しているほか、映画俳優の陳坤の著書「鬼水瓶録」のためのイラストを手掛ける。

撮影:Duncan Wright



「After light dress – homage to Atsuko Tanaka」2019

中島 伽耶子（日本）

1990年京都出身。2013年、京都精華大学洋画コース修了。2015年、東京藝術大学美術研究科修士課程修了。水や光などを主な素材とし、場所との関わりを出発点に作品を制作。積極的に作品の中に変化を取り入れ、空間と作品が一体となる、緊張感のある場を作り出す。

「川の向こう、舟を呼ぶ声 群衆」2018

中谷 ミチコ（日本）

2010年VOCA展奨励賞受賞、2012年ドレスデン造形芸術大学Meisterschülerstudium修了。一般的なレリーフとは異なり凹凸が反転している立体作品を制作。イメージを粘土で成形し、石膏で型をとる。原型の粘土を取り出し、空の雌型に透明樹脂を流し込む。物体の「不在性」と「実在性」を問い続けている。

撮影:Tomoya Miura

「12島と港の物語 回遊式アニメーション」インスタレーションビュー 2016年

蓮沼 昌宏（日本）

1981年東京生まれ。画家・記録写真家。東京藝術大学大学院美術研究科美術解剖学研究室博士課程修了。現在、愛知県を拠点に活動。イメージの自律性、夢の不思議さに関心を持ち、「キノーラ」によるアニメーションを中心に、写真、絵画を制作する。

※写真は過去の作品です。

第2弾参加アーティストプロフィール（2020年1月31日時点）

Venereal Architecture, 2014　Photo by Ivan Buljan

クレア・ヒーリー&ショーン・コーデイロ（オーストラリア）

オーストラリア出身。消費社会からこぼれ落ちたものを再構成し、遊びやユーモアの感覚をもちながら美術史的参照をもとに作品制作を行う。既成の構造物に介入し彫刻やインスタレーションを仕上げている。作品には、人々とモノの移動を可能にし、また同時に制限するグローバルなネットワーク、経済システムが反映されている。

撮影:Memo Carcamo

'Heavy Metal Dream Destroyer', 2019
Photos: Sam Portillo

シモン・ベガ（エルサルバドル）

1972年エルサルバドル生まれ。メキシコ・ベラクルス大学卒業後、マドリッド・コンプルテンス大学にて修士号取得。ドローイング、オブジェ、インスタレーション、パフォーマンスを制作する。中米でみられる市場や自作建造物、ストリートや海岸にある屋台などからインスピレーションを受けている。彼の彫刻作品は、宇宙開発競争時にNASAとソ連で開発されたカプセルや宇宙ステーションを参照にした第三の世界を作り出す。

アレクサンドル・ポノマリョフ（ロシア）

1957年ドニエプロペトロフスク(旧ソ連、現ウクライナ)出身。1973年にオリョール美術大学を卒業後、1979年にオデッサの海洋工学学校を卒業。ロシア海軍艦隊にて従事するかたわらで海上、北極、グリーンランド、南極で作品制作を行う。ロシア・芸術アカデミー会員、フランス芸術文化勲章受章。

撮影:Kenryou_Gu

《移住を生活する 釜山-金沢》(シングルチャンネルビデオ)より(2018)　撮影:Can Tamura

村上 慧（日本）

1988年、東京生まれ。東京を拠点に活動。2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年より自作した発泡スチロール製の家に住む「移住を生活する」プロジェクトを始める。内省を反転させて社会的なアクションに変換する方法を探っている。著書に『家をせおって歩く』福音館書店(2019)及び『家をせおって歩いた』夕書房(2017)がある。2017年文化庁新進芸術家海外派遣制度によりオレプロ(スウェーデン)に滞在。

Bug report (Terminal)　制作クレジット: ADAGP Keita Mori
撮影:レヴェッカ・ファニュル, Courtesy the artist and Galerie Catherine Putman

盛 圭太（日本）

1981年北海道生まれ。多摩美術大学卒業後渡仏。文化庁新進芸術家海外研修員としてフランスパリ国立美術学校に在籍。その後パリ第 VIII 大学大学院美術研究科先端芸術修了。パリを拠点に活動を行っている。2017年フランス初のコンテポラリードローイングに特化したアートセンター、ドローイング・ラボにて、施設のこけら落しとなる個展「Strings(キュレーション:ガエル・シャル ボー)」を行った。

「潮流 – ガチャポン交換器 –」2017年
奥能登国際芸術祭2017

力五山（日本）

2007年「力五山」結成。アートを人々と共生し役立つものとして機能させる事を主目的とした、加藤力、渡辺五大、山崎真一によるアーティストユニット。制作発表する場には、固有の環境があり人々の営みがある。複雑に成り立っている場に対し、広い間口で様々な事柄を取り入れて、色々な表現手段を絡み合わせて「物語」を紡ぎ出す。
アートの力で人々を繋ぐ作品を展開している。

※写真は過去の作品です。

ご参考／2019 年 8 月 6 日リリース済み

第１弾参加アーティストプロフィール（2019 年7月31日時点）

青木野枝（日本）

1958 年生まれ。東京都出身。多摩美術大学客員教授。従来の彫刻の概念を超えた、新しい自らのスタイルを構築し、現代日本を代表する彫刻家としての地位を確立した。

大岩オスカール（ブラジル）

物語性と社会風刺に満ちた世界観を、力強くキャンバスに表現する油絵画家。独特のユーモアと想像力で、サンパウロ、東京、ニューヨークと居を移しながら制作を続けている。

カールステン・ニコライ（ドイツ）

1965 年生まれ。ベルリンを拠点に活動。科学的な根拠にインスパイアを受けながら、グリッドやコード、エラーやランダム構造といった数学的なパターンや自己組織化現象について探求する。

金氏徹平（日本）

1978 年京都府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。プラスチック製品や雑誌の切り抜き、おもちゃなど身の回りの物を収集し、コラージュ的手法で作品を制作。

カルロス・アモラレス（メキシコ）

1970 年メキシコシティ生まれ。サブカルチャー、伝統工芸、ポピュラーカルチャートを組み合わせた画像編集によるコンセプチャルアートに取り組む。

キムスージャ（韓国）

1957 年大邱（テグ）生まれ。音や光、その文化特有の素材を用いながら、パフォーマンスや映像、写真、インスタレーション等多様なメディアで、様々な文化が複雑に重なり合い共存する社会を表現している。

サイモン・スターリング（イギリス）

1967 年にサリー州エプソム生まれ 。2005 年英国で最も活躍する現代美術家に贈られるターナー賞を受賞。綿密な調査をもとに秘められた歴史やエピソードを見つけ出し、膨大なプロセスを内在させた作品に取り組む。

さわひらき（日本/イギリス）

1977 年石川県生まれ。ロンドン大学スレード校美術学部彫刻家修士課程修了。心象風景や記憶の中にある感覚といった実体のない領域を、映像・立体・平面作品などで構成されたビデオインスタレーションで表現する。

スボード・グプタ（インド）

1964 年インドビハール州カガウルに生まれ。大量生産されたステンレスの道具など、日常的な道具から、移動やグローバリゼーションそして宇宙といった共通の課題を反映させた作品制作を行う。

原広司（日本）

1936 年神奈川県生まれ。建築家、東京大学名誉教授。世界の多様な集落の空間形態を調査し、独自の建築理論を展開。
2013 年に日本建築学会大賞を受賞。

ひびのこづえ（日本）

静岡県生まれ。東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。
コスチューム・アーティストとして広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなどその発表の場は、多岐にわたる。

※写真は過去の作品です。